

ふるさと再発見

～幕末維新と徳地～

8歳の志願兵 ―島地山畑村―

慶応元年（1865年）11月のこと、島地山畑村の農民25名が大庄屋宇多田四郎兵衛に銃陣稽古の参加を届出したことが残っています。

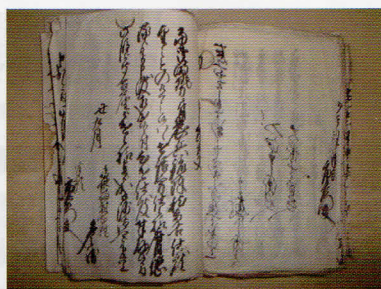
慶応元年11月は第2次幕長戦争（四境戦争）の半年前です。島地山畑村の農民たちも長州藩の危機を救うために立ちあがったのでしょう。ところが、この届出に元服（14歳）前の子供6名が参加しているのです。最年少は8歳の鷹之進、次いで9歳の良蔵……。どうしてこんなことが起こったのでしょうか。

慶応元年9月の宇多田家の文書です。「当御時勢につき、農兵銃陣稽古仕り度く望むものこれ有り候はば、世話方仕り候よう鷹懲隊より御申し相成り候に付き、心遣い仕り度く存じ奉り候」（このような時勢なので、農民の中で銃陣稽古を希望する者がいたら世話をするよう鷹懲隊から申し入れがありましたので、ご配慮頂こう……）

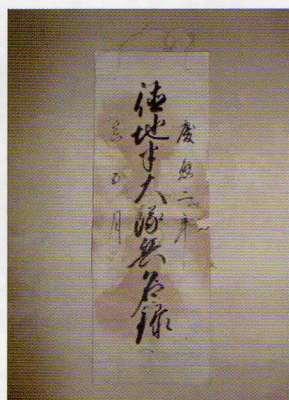
鷹懲隊は奇兵隊と共に徳地へ転陣、駐屯をした部隊です。「大田絵堂の戦い」直後に、諸隊兵200名と共に大砲小銃を携え、徳地勘場を攻めて俗論派の代官を追放し島地の守備を任されます。その後、隊員規則の「諭示」をもって草莽崛起を訴え、人々の信頼を得たと思われます。「郷勇隊の者は、おのずから撃剣場へ罷り出、農家の小児は学校へも参り教えをうけ候様なづけ申すべき候事」（ふるさとを守る人は自分から訓練場へ出るよう、

農家の子供は学校へ行って教育を受けるよう慈しみ教えること。）これは「諭示」の第7条。

慶応2年（1866年）5月には、徳地半大隊（郷土防衛隊188名）が編成されます。名録の記載を見ると、徳地の全域から若者が参加すると共に、各村々の寺も部隊へ協力する体制を整えたことが分かります。8歳の子供までが志願する幕末徳地の高揚感と人々の心意気、そして新しい時代に向かって進もうとする隊士たちの息づかいまでも宇多田家の古文書から読めそうです。



宇多田家文書（慶応元年9月）
山口県文書館蔵



徳地半大隊兵名録
（慶応2年5月）
山口県文書館蔵